

今度は、私達がこの世を去ったら、大きな器の人と、小さな器の人の世界が違う訳です。この世的に言ったら、その器の広い人を見ると明るくて見ていられない。

しかし、その明るくて見えない世界にいる人でもね、この世に出て来て肉体を通して場合には、みんな一緒に話が出来たり、笑ったり、いろんな事が出来る訳ですよ。

そうすると、例えば、高橋信次先生という人が本を書いた。その本の中には、他の人が書いたのと同じような文句も書いてある。読んだらそれで終わりの人もいる。

実は、心の眼から観ると、本当の心の器の大きい人、本当の慈悲と愛の心で書いた人の字は、その文字が全然違う訳ですよ。金色に光って観える訳ですよ。

それで、その時高橋先生の事務所から出て家に帰ったんですが、もう落ち着かない訳ですよ。今まで経験した事の無いのがそうだった訳ですからね。

「私は一体どうなるのかな」と、思いながらその夜、床に就いた。

一一、魂のグループとの対面——寿命を宣告される

ところが、寝ようとしたら、私の枕元に、二人の人がスーツと姿を現した訳です。その時が初めて、自分の魂のグループというものを観た時なんです。

その強烈な修行をしていたのは、お坊さん（七〇〇年代／中国・五台山）ですね。もう一人の人は、暫くの間私から離れるという、このお坊さんの代わりの人だったんです。その時間帯の中での、交代の人が出て来たんです。剣を下げた武士（四五〇〇年前のエジプト人）なんです。そして、そのお坊さんが、

「今日、高橋先生という方に聴いた通り、私は三ヶ月間、あなたから離れる。その間、この人が私の代わりやってくれるから、この人の言う事をよく聴くんですよ」と言われ、その時に、

「あなたは、今生は〇〇歳まで生きる。

あなたは、それまでこのような事をしなければいけない」

と、そう言われた訳ですよ。そして話をし終わったら、パッと二人の姿が消えた。

その時言われた言葉は、未だに強烈に残って去らない訳ですよ。自分が何歳まで生きて、何をやらなくてはいけないなんて……そんな阿呆な事があるものかと思つた訳ですよ。

そうですね、自由で無くなる訳ですよ。私は商売やっていた。商売で一所懸命儲けて、それから……なんて考えていた訳ですからね。

ですから、そんな事は全然、私は取り合わないように自分の心をしていたんですけどもね、毎日その事が、ここから（自分の心から）無くならないんですよ。

そういう事があつて、今まで来た訳ですけどね。

高橋先生から頼まれて、私が一緒に仕事をするようになったのは、それから半位置経つてからなんです。一緒に仕事をしながら、先生が話をする中でよく、

「私の時間は、四八歳までですよ。私の話は沢山の人が聴いているけど、どうですか……」

と、仕事をしながら、いろんな事を仰っていた。私は、「本当なのかなあ」と思っていた訳ですね。

ところが、高橋先生は本当に自分で仰つた時間にちゃんと終わられたんです。

そして、その後どうなるかということも、実は先生の仰つた通りになってきている訳です。

私はいろんなものを、見たり聞いたりはしていますけれども、別に何とも思いませんよ。「あゝ、先生の仰つた通りになっているな」とは思っていますけどね。

でも、どうなった、こうなったということは、あんまり人に言う事じゃないですね。しかし、全てその通りになっている訳ですよ。

そうすると、私が魂のグループに言われた事は、「これは只事じゃないぞ」になつてきた訳です。

まあこれは、思うから尚そうなるのかどうか知りませんが、諦めたということでもないですけどもね、守護霊から、「こちらですよ」と言われる。しかし、他の事をやりたいから、それをやっている、何だか何時の間にか、こちらの方（心の教え）をやっている訳ですよ、知らない間にこちらをやっている。

「こんな阿呆な事はない」と思つて、また他の事をやると、また戻っている訳ですよ。

そうすると、これはもうどうにもならない。それじゃあ、自分で腹を決めるしかない。まあ、何処まで出来るか分かりませんが、せめてもね。

結局、商売も辞めて——まあ、何とか食べていけるだけはありませんから——こういうふうには、あちこちで話をさせて貰うようになってきたんですね。守護霊が、「あなたはね、今ような物の無い生活は当然なんですよ。」

あなたが過去に生まれた時をズーツと振り返ってご覧なさい、今のあなたの生活は、今ままで一番良い時ですよ。こんな贅沢な事はありませんよ。ダメですよ」

なんて言われる。(笑)もう、しようがないですから、何も言わないですけど、やっぱり、「あれ欲しい、これ欲しい」と出て来ますよ。しかし駄目なんですよ、思っただけで——。

そういう一つの現象を通して、中国語で喋った守護霊とか、魂のグループの事が、はっきり分かった訳ですよ。

そして私達は、今現在があつて、そして終わって次に行く。また次に行く。ドンドン……この中を輪のようにグルグル……廻っているという事が分かったんですね。

そうすると、この世でいい・ころ・加減な事をやったら、これは六人の成長が止まってしまう訳です。

自分の終わる時間を言われている訳ですから、高橋先生が亡くなってからですけど、それからは自分の残っている時間を書き出しているんですよ。

そして、ある一定の時に、時間を差し引いていくと、「あゝ、後何年何ヶ月だ」と分かる訳ですね。

しかし、まだ一寸は時間がありますから、大してそんなに感じない訳なんです。

あれが、段々……後何日だとか、何時間だとか、何分とか言われたら、人間はどのようになるのだろうと、今思っている訳ですよ。

これは私ばかりじゃないですね。このように、人間はどんな人でも、時間を持って出て来ているんですよ。そして、今生きている訳です。

そうすると、これはよく分かりますね。生まれたということは、死ななければいけない訳です。

そして、その生まれて死ぬまでの間に、生きる為の全てを、神仏が私達に与えてく

れている訳ですよ。生きる——生きていかなくてはいけない。

——次回に続く

次回『二二、生まれてきた目的』の更新予定は、三月下旬頃です。お楽しみに。